

ふたなり魔術師アイリオン
くエツチと波乱に満ちた珍道中！？く

草加直人

プロローグ 運命の出会い！？ ふたなり美
少女魔術師アイリオンと、美青年純情剣士
ヒュバート

この世は、弱肉強食だ。

「はあっ、はあっ！！ た、助けてっ！
誰
かっ、誰かあっっ！！」

辺境の村に住むソフィアは、下着だけというあられもない姿で森を駆けながら、自分の軽率な行動を悔やんでいた。

辺りはすでに日が暮れかけていて、時折聞こえてくるのはカラスの鳴く声。

若い娘がそんな時間に、一人で薄暗い森の中へと足を踏み入れてしまう。それがどんな事になるのか、ソフィアも判っていた。

けれどもどうしても尿意を我慢する事が出来ず、人気のない場所へと足を踏み入れてしまったのだ。

「へへへっ。その細足と格好で、いつまで逃げていられるかなあ??」

背後から下品な声が響く。薄汚れた衣服を身にまとい、手には血で汚れた大振りの剣。いかにもゴロツキ風情の男が、厭らしい笑みを浮かべながらソフィアを追い掛けていた。

「はあっ、はあっ!! あうっ!？」

足下を照らす光は木々の間から差し込んでくる僅かな太陽光のみ。そしてソフィアは何

度も背後を気にしながら走っていた為に、地面から飛び出していた石に足を引っ掛けて蹴つまづいてしまった。

足に鈍い痛みが走る。転んだ拍子に足をくじいてしまったのだ。

足首をさすりながら顔をしかめる。ふと背後に迫ってきた気配に気づき、ゆつくりとそちらに視線を向けるソフィア。

「くははっ！ どうやら、ゲームオーバーのようだなあ？ んん？」

「い、いやっ！！ いやあつ、いやあ
あゝゝゝっ！！？？」

男の手がソフィアへと伸ばされて。

同時に、男の背後から巨大な熊が姿を現した。

この世は、弱肉強食だ。

熊は背中に男とソフィアを担いで、子供の待つ巣へと向かっている。

男からは血が滴り落ちていた。熊を前にして思わず雄叫びをあげ剣を振り上げた事で、返り討ちにあつたのだ。

ソフィアはその光景を目にし、気絶してしまつた。そのお陰で殺されずに済んでいる。けれどもこのまま巣へと辿り着いてしまえば、彼女の命が後数時間の間になくなってしまふのは明白だつた。

ふと、熊が足を止める。低い唸り声をあげ、目の前の暗闇に鋭い視線を向けた。

暗闇の中で、紅く光る眼光。それは大きく翼を広げると、奇声を上げる。奇声と共に生み出されたのは、全てを切り裂く真空の刃。

刃は熊の頭だけを綺麗に切り落とし、そして頭を失つた熊はその巨体を地へと倒した。

この世は、弱肉強食だ。

熊の死骸を足爪で掴み、男とソフィアを手で掴んでいる異形の化け物。

悪魔と呼ばれるその存在は、大きな翼を広げ空へと飛び立った。

人間と同等かそれ以上の知能を持ち、動物以上の力を持つ存在。悪魔。この世界の頂点に立つ生物と言っていていい存在。

——ある特別な存在を除いては。

「あら、あんたいーもん持つてるじゃないの？ それ、あたしに寄りきなさい？」

真っ赤に染まる空に響いたのは、まだ幼さを残している人間の、女の声。

悪魔が顔を上げ、声のした方へと視線を向ける。大きな樅の木の上にあぐらを掻いて座っている少女に向けて。

少女は立ち上がると、血よりも紅いマントを翻す。そして口の端を吊り上げ、手の平を悪魔に向けて突き出した。

『ヘル・フレイムっ！！』

少女の手から漆黒の炎が生まれ、まるで意

志を持つているかのように、悪魔に向かつて
一直線に進んでいく。

声を発する間もなく身動きする間もなく、
漆黒の炎は悪魔だけを包み込みあつという間
に消し炭にした。

この世は弱肉強食。力あるもの魔力あるも
のが世界を制し、生態ピラミッドの頂点に位
置する。

そしてこの少女、莫大な魔力を持つ魔術師
アイリオンも、そんな頂点に近い場所に位置
している存在だった。

悪魔という支えを失った熊の死骸と男とソ
フィアは、そのまま落下していく。

「おつとと！！」

慌ててアイリオンは手の平を、熊とそして
ソフィアに向け小さく呪文を唱える。熊の死
骸とソフィアの身体が魔力の壁に包まれ、中
空に停止した。

「こんだけでかい熊なら、今日は豪勢な熊鍋が食べられそーねっ♪ それに、こっちのほうもっ♪」

そう言っつてアイリーンは熊とソフィアを交互に見てから、涎を滴らした。

一夜明けて。ソフィアの家で一晩を過ごしたアイリーンは、朝早くに家を出た。

ソフィアは頬を染めて名残惜しそうにアイリーンを送り出した。夜に何があつたかを口にするのは、野暮というものだろう。

「ふふんふふくん♪ ふふん♪ ふふふつ、今日もいい天気ね♪」

鼻歌を歌いながら、軽い足取りで街道を進むアイリーン。

透き通った金色の髪を後ろで結いポニーテールにしている、歩く度にぴよんぴよんと踊るように跳ねている。

顔は丸みを帯びた幼い顔立ち。目は僅かに垂れていてくりつと大きく、澄んだ蒼色をし

ていた。
肌は張りがあり、染み一つなく若々しい。
背中に羽織っているマントは、表地は血よ
りも紅い緋色。裏地は闇のように深い漆黒
色。所々に魔術的な意味合いを持つ装飾が施
されており、それがただのマントではない事
を示している。
マントは首の前でブローチによつて留めら
れ、その下には胸を申し訳程度に包んでいる
衣服が見え隠れしていた。
胸は彼女の幼い顔とは似つかわしくない程
大きく、歩を進める度にあふあふと振るえて
男達の視線を釘付けにしている。
視線を下に向けると、引き締まったウエス
トが目に残まる。無駄な肉の付いていないそ
こは、豪腕の男が抱きついたら折れてしまふ
んじゃないかという程華奢に見える。
そしてその下。下腹部を覆っているのは、
ぎりぎり股間を隠している程度のホットパン
ツ。立ったまま上体を前に倒すと、下着が見

え隠れしてしまおう。
すらつとした太股はハイソックスによって
隠されていて、膝当ての付いたロングブーツ
を身に付けていた。
そして、一際目立つのは彼女の手に装着さ
れている無骨なガントレット。手首から指先
までが銀製の手甲で覆われており、左右の手
の甲辺りには大きな宝玉が埋め込まれてい
て、中には魔術文字がびつしりと刻まれてい
た。
このガントレットが、彼女の武器であり最
大の防具となっている。攻撃の際にはガント
レットに魔力を集中させて直接殴り、防御の
時はガントレットで受ける。魔術師には珍し
い格闘スタイル。アイリーンはそのスタイル
を好んで使っていた。
とはいえ、彼女の得意技はあくまで魔法。
人間のゴロツキ相手ならば格闘術で事足りる
程度だ。
ふと彼女が足を止め、目を細めて街道の先

をじつと見つめる。
ぼんやりと石壁に囲まれた街が見えてきた。
「昼過ぎには街に着けそうね。今度こそ、あいつの情報が得られればいいんだけど」
誰に言うでもなくそう呟く。先程まで上機嫌だったアイリーンの表情が一瞬険しくなつた。ように見えた。
「さーてつと！！ それじゃあガレリア・シテイに向けて、しゅっぱーつ！！」
声を大にしてそう言い拳を天に向けて突き出し足音を踏み鳴らし、アイリーンは歩みを早めたのだった。
ガレリア・シテイ。大陸の東端に位置する鉱山で有名な街。出稼ぎにやってくる鉱夫や、高質の鉱物を取引しようとしてくる商人達で年中賑わっていた。
アイリーンは頭の後ろで手を組み、賑わう露店を横目で見ながらゆっくりとした足取り

で歩く。

ふと、ある露店の前で足を止めた。並んでいるのは大小様々な形をしている宝石や宝玉の数々。しかもそれはただの宝玉ではなく、アイリーンのガントレットに装着されているものと同じように、中に魔術文字が施されていた。

まじまじと見てみると、フードを深く被った店主が、不気味な笑みを浮かべてから話しかけてくる。

「ひえひえひえ。お嬢さん、うちの露店に目を付けるとは、なかなかお目が高いねえ？」

声に視線を上げて一度店主と顔を合わせ、すぐに視線を品物に戻しアイリーンは口を開く。

「これ、あなたの自作？ それとも裏ルートから流されてる盗品？」

その言葉に店主は再び不気味な笑みを浮かべるだけで、何も答えない。

しばらく品物に目を向けていたアイリオン
だけど、やがて視線を店主に向ける。
「けっこーなモン扱ってるみたいじゃない。
で、一つ質問」
「ひえひえひえ。答えられる事なら」
領き、眉を吊り上げて真剣な表情で口を開
いた。
「ここ最近あんたの所にやって来た客の中
に、真っ青のローブを羽織った魔導師はいな
かった？」
店主は目を大きく開くと、すぐに首を左右
に振る。
「とっ、とんでもないっ！！うちのよう
な露店に来るわけがっ！！」
「そう」
アイリオンは店主の言葉が終わる前にそう
呟くと、小さく溜め息を付いて立ち上がった。
そして露店から離れていく。背後で店主が
何事か叫んでいたけれど、アイリオンが振り

返る事はなかった。

露店で扱っていた宝玉や宝石は、非常に価値のあるものだった。アイリオンが見た限りだが、国宝級の品物も存在していた。

けれどもアイリオンにとってはそんな事どうでも良かった。アイリオンが求めているものは、ただ一つ。

「この街に、あいつはいないみたいね。だったら、もうここに用はないわ」

そう言うのと、マントを翻して人々で賑わう露店を後にした。

アイリオンがガレリア・シテイを旅立ってから二日が経った。辺りは既に暗くなりはじめており、空にはまばらに星の明かりが見えていた。

湖の近くで暖を取っていたアイリオンは、眉を吊り上げて苛立たしげに頭を掻く。

「つたく、久しぶりに野宿しようとしたらっ。いきなりなんて、ついてないって言

うか。はああー」

そう言っつて大きな溜め息を付く。アイリーンの悩みのは、彼女を覆うように囲んでいる気配にあつた。

気配の数は、おおよそ十人程度。易々と気配を探れた事から、恐らく相手はゴロツキ。

女一人で野宿しようとしていた所に、この気配。目的は、口にしなくても自ずと判つてしまふ。

目を細めて腰に手を当て、辺りに視線を向けるアイリーン。気配の主達はまだ姿を現さない。本人達はうまく隠れているつもりなのだろう。

しばらく姿を現すのを待っていたアイリーンだけれど、一向に姿を見せない事に嫌気が差し、気配に向けて声を放つ。

「いつまでそーしてつもり？ 言つておくけど、あんた達みたいな素人に隙を見せる程、あたし間抜けじゃないから」

近くの茂みが鳴る。そしてすぐに男達が茂

みから姿を見せた。

その数、十人。全員がボロ雑巾のようなバ
ンダナを頭に巻き、動物の皮で作られた衣服
を身にまとい、そして右手には湾曲した剣を
手にしていた。

一人の男が一步前に出て、厭らしい笑みを
浮かべながら口を開く。

「へへへ。なんだよ、ばれてたのか。ど
うやら見た目よりも出来るみてーだなあ。
ええつ？」

「あんたが、こいつらの親玉？」

男の方に視線と体を向け、やる気のない声
でそうアイリオンは聞く。男は小首を傾げる
と、曲剣で軽く肩を叩きながら胸を張った。

「おうよ、俺様がこいつ等のボスよ！ここ
いらでは結構名の知れた盗賊団なんだが」
「能書きはいいから」

自慢気に自分達の事を話そうとする男の言
葉を手で制するアイリオン。目の前の男達に
割く時間など、一分一秒も惜しかった。

「あたしを襲いたいんでしょ？ お好きに
どーぞ」

そう言ってから両方の拳を握り締め、胸の
前で構える。

「ま、あんた等があたしに指一本でも触れる
事はないだろーけど、ね？」

しばらく口をあんどぐり開けて呆然としてい
た男達だったが。

やがてアイリーンの言葉が自分達を見下し
ているものだど気付くと、怒りで顔を真っ赤
にした。

「いい度胸だこのアマあ！！ おい！ 野郎
共っ！！ 手加減なんて必要ねえ！ やつち
まいなっ！！」

親玉の声に、他の男達が怒声を上げてアイ
リーンに襲い掛かっていこうとする。

アイリーンは口の中で小さく呪文を呟く。
ガントレットに埋め込まれた宝玉が、鈍く光
る。

男達の刃と、アイリーンの拳が交叉しそう

になる刹那。

「待ちたまえっ！！！」

凜とした男の声が、辺りに響き渡った。声は大気を震わせる程の力があり、男達もアイリーンすら動きを止めて声のした方へと視線を向けた。

まず最初に飛び込んできたのは、まばゆく輝いている透き通った水色の髪。髪は短く切り揃えられ、癖のある毛が夜風で揺れている。

すらつと細く整った顔立ちに、髪と同じく透き通った水色の瞳。目は細く切れ上がっていて、より一層彼を利発そうに見せていた。

首には赤いスカーフが巻かれています、風にたなびいている。鍛え上げられた胸板を包んでいるのは、筋肉が見える程薄い布地。肩や腕は銀製の甲で覆われており、肘から手にかけて魔術文字の描かれたグローブを身に付けている。

引き締まった腰と、腰を守る銀製の防具が

続き、すらりと伸びた足は薄い布地に包まれて
いるだけ。そして膝から足先にかけて銀製の
ブーツに覆われていた。

年はおおよそ二十歳を迎えた頃。その身長
は一般的な男性よりも高い。

そして彼の背中に担がれているのは、彼の
長身でも大きすぎるのではないかと思える程
の長剣。

握りや鍰に描かれた装飾を見る限り、価値
のある剣である事が伺えた。

青年は膝を折ると、跳躍し登っていた木の
頂点から飛び降りる。

そしてアイリーンとゴロツキの親玉の間に
割って入るように、地面に降り立った。

「いたいけな少女相手に、大の大人が数人が
かりで襲い掛かるなど、恥ずかしく思わない
のかっ!？」

「ああん!？」

親玉に向かって指を突き刺し、そう言い放
つ青年。その言葉に親玉は青筋を浮き上がら

せて、アイリーンは小さな溜め息を付いて額に手を当てた。

青年は、アイリーンが一番苦手になっているタイプの男だった。嫌味な程誠実で嫌味な程爽やかで。

そして嫌味な程正義感が強い。目の前の青年は、下心も持たず単身で女を助けに入る男は、今では絶滅したに等しいそんな男の可能性が高かった。

「おいおいアンちゃんよお。女を前に格好付けたい気持ちは判るが、ちよいと無謀すぎるんじゃないかあ？ こっちはこの人数」
「黙れっ！！ 大人しく引くつもりがないならっ」

そう言うと、青年は剣の柄を握り僅かに刀身を覗かせた。月明かりが刀身を鈍く照らす。

「斬るっ！！」

それ以上、青年と親玉の間に会話はなかった。必要なかった。

親玉が勢いよく手を挙げると、アイリオン達を囲むようにしていた男達が一斉にそれぞれの武器を振り上げ、青年に向かって襲い掛かってくる。

青年は片手でアイリオンを庇うようにしながら、すらりと長剣を鞘から抜き放つ。

そして、片手で横に一閃。

「ぐわあああっ！！??」

剣が風圧を生み出し、数人の男達が吹き飛ばされる。

背後から奇声を上げ短刀を振りかざし、襲い掛かってくる男。

青年はアイリオンを庇うようにしていたもう片方の手を、男に向けて伸ばした。

「ちよっ！？」

慌てて青年の手を制そうとしたが、それより先に、青年が、男の親指を掴んだ。

そして親指を外側に開くようにする。男は指に走った激痛に悲鳴を上げ、短剣を落とすた。

目の前で行われた神業に、アイリオンは思
わず口を開けて呆然としてしまう。今青年が
やっつてのけた技は、現実的には不可能な事
だ。

どう動くかも判らない他人の手を、しかも
武器を手に行っている男の手の指だけを狙って
掴むなど、天才的な動体視力を持っていない
限り不可能な事だった。

アイリオンが呆然としている間に、青年は
全てのゴロツキを撃退していた。男達は手や
腕を押さええて苦しそうな呻き声を上げてい
る。

軽く息を吐いて剣を鞘に収めてから、青年
はアイリオンに顔を向けた。そしてにつこり
と、眩しいくらい爽やかな笑顔を見せる。
「待たせちゃってごめんね？ 大丈夫だった
かな。つと、ごめんごめん。まだ名前も
言っつてなかったね？」

「私はヒュバート。しがな旅の剣士さ」
照れくさそうに頭を掻いてそう口にする青

年、ヒュバート。
そんなヒュバートを呆れたような目で見ながら、アイリオンは何か出会う運命じみたものを彼に対して感じてしまい、大きな溜め息を付いた。
その夜、アイリオンとヒュバートは街道沿いの宿屋に部屋を取っていた。
先程一階の食堂で遅い夜食を取り終えて、今はそれぞれの部屋に戻るところ。
階段を上がりきり、正面の部屋で足を止めるアイリオン。後ろにいるヒュバートに視線を向けた。
「それじゃあ、えつと」
「呼び捨てでいいよ、アイリオンちゃん」
再びアイリオンに眩しい笑顔を向けるヒュバート。ちゃん付けで呼ばれて、背中にゾクゾクとしたものが走る。
「ヒュバート。あたしの事も、アイリオンって呼び捨てでいいから。て言うか、お

願いだから呼び捨てにして」

「そうかい？　それじゃあ、アイリオン」

再び笑顔。大きな溜め息を付いてドアノブに手をかけると、振り向かず声に掛ける。

「明日の朝。もしあたしよりも先に起きたら、勝手に行っちゃっていいからね？　あたし達は別に、一緒に旅をする仲でもないし行く先が一緒って訳でもないんだから」

ヒュバートの返事を聞かずにドアを開けて、部屋に入る。扉を閉めてドアによりかかり再び溜め息を付いた。

アイリオンには判っている。恐らくヒュバートは、朝起きたらアイリオンの事を待っているだろうと。嫌味な程のお人好しの彼なら、そうするだろうと判ってしまう。

「あいつと別れるまで我慢できるかな、あたし」

誰に言うでもなく、そう呟く。アイリオンは扉から離れると、マントも外さずにベッドに倒れ込んだ。

それからしばらくして。宿の主人も床に就いた頃。ヒュバートはすやすやと寝息を立てて夢の世界へと旅立っていた。

僅かに扉のきしむ音が響く。ゆつくりと扉が開かれ、部屋に一人の少女が入ってくる。

少女は荒い息を吐きながら、音を立てないようにゆつくりと扉を閉めた。ヒュバートはまだ少女の存在に気付いていない。足音を忍ばせ、ヒュバートの間近まで近づく。

ベッドの上に少女が上がる。僅かに鳴ったベッドが軋しむ音。

熱い吐息を漏らし、ヒュバートに跨ったまましばらく熱い眼差しを向けていた少女。やがて自らの衣服に手をかけて、ゆつくりと捲り上げる。

月明かりに照らされ、少女の真っ白な肌が浮かび上がった。少女はヒュバートの広い胸板に手を付くと、腰を怪しく振り自らの下腹部で、ヒュバートの股間を刺激しはじめる。

艶のある声が少女の口から漏れた。少女は腰を前後左右に怪しくくねらせ続ける。

「んんっ？　な、何だっ？？」

股間にむず痒い感覚を覚え、ゆつくりと目を開いていくヒュバート。

目を覚ました彼の瞳に映ったのは。

「はあっ、はあっ、んあうっ！？　ああっ♪　き、気持ちいいっ♪」

自らに跨りあられもない格好で腰を振る年端もいかなない少女、アイリートの姿だった。

ヒュバートは口をぱくぱくとさせ、瞬きもせずアイリオンを見つめている。その視線に気付き、アイリオンもヒュバートを見つめた。

「ああっ。　お、起きちゃったのっ？　このままっ、寝ててくれたら良かったのにつ。　はあんっ！？」

アイリオンは、ショーツ一枚だけを履いているだけの格好。上半身には何も身に付けていない。

剥き出しになっている自らの胸を両手で掴み、指で乳首を摘んで転がす。既に乳首は指先程に勃起していて、彼女が快感を得ている事が伺える。

「ああっ！ 乳首気持ちいいよおおっ♪ コリコリするの好きっ、好きいいいっっ♪」

ヒュバートの視線が、アイリーンの胸に向けられる。そして。

「ぶはああっ！？」

鼻から大量の血を噴き出して気絶した。

「ひやああっ！？ ちよっ、ヒュバート！？ 鼻血って、大丈夫？」

軽くヒュバートを揺すってみるけれど、全く反応はない。ヒュバートは顔を真っ赤にして鼻から大量の血を流したまま、白目を剥いて気絶してしまっていた。

「ってかあんた、胸見ただけで鼻血出して気絶って。 どんだけ純情なのよ？？」

ぺちぺちと頬を叩く。やはりヒュバートに

反応はなかった。

アイリーンはしばらくヒュバートの上に
乗ったまま呆然としていたが。

「はあっ、はあっ。だ、だめえ！
体の疼
き、収まんないっ！！」

色っぽい声でそう呟くと、再び自らの乳首
を刺激しながら、下腹部をヒュバートの股間
に擦り付けだす。

ヒュバートの意志とは関係なく、刺激され
次第に大きさを増していく男性器。既にそこ
はズボンを押し上げる程に大きくなってい
た。

「あああっ♪ おっきいのがあそこに当たっ
てるよおおくとっ♪ ああっ、気持ちい
いっ！ 気持ちいいいくとっ♪」

唇を舌で舐め、厭らしく腰を振るアイリー
ン。アイリーンの下腹部を包んでいるショ
ーツは不自然に膨らんでいた。

「あ、あたしい！ 興奮してきて、おつきく
なっちやつてるよおっ！！」

「苦しくて、もう履いてられないっ！！」
そう言うと、腰を僅かに浮かせてシヨーツ
を一気にずり下ろす。
シヨーツから顔を覗かせたのは、本来アイ
リーンに付いている筈のないもの、男根だっ
た。
「ああっ♪ あたしのこれ、エッチになっ
ちやつてるよう！！ んんっ！ はあっ、は
あっ、ふああっ！？」
足を更に大きく開き、ヒュバートの股間に
自らの女性器を強く押し当て腰を左右に振
る。女性器からは大量の愛液が溢れ出して
いて、まるでお洩らしをしまつたかのように、
ズボンに染みが出来ていた。
腰を怪しく左右に振り続けるアイリーン。
乳首を刺激する指の動きもどんどん激しくな
り、声のトーンが上がっていく。
「ああっ！！ イツちやいそうっ♪ イツ
ちやうよお！！」
「あたしっ、ヒュバートのあそこにつ、あた

しのここ擦り付けながらっ、イツちやうう
う／＼っ！？」

動きを止めるアイリーン。背筋をぴんと伸
ばし、口を大きく開け嬌声を漏らした。

「っひあああ／＼っ！！？？　イクっ！！
イツクうう／＼／＼っ！！？？」

アイリーンの男根が震え尿道口がぱつくり
と開き、真っ白い精液が勢い良く噴き出し
た。何度も腰を上下にけいれんさせながら、
断続的に精液を吐き出し続ける。

やがて全ての精液を吐き出し終わると、力
なくヒュバートにその身を寄り添わせた。

「はあっ、はあっ！　ふうっ、ふう
うっ！！」

「ま、また今日も、しちやつた。しかも、
今日出会ったばっかのヒュバートをつ、オナ
ニの道具にしちやうなんてっ」

絶頂の余韻が次第に引いてきて、先程まで
熱に浮かされていたアイリーンの心が、次第
に落ち着きを取り戻す。

